2020
6
令和2年6月10日発行（毎月1回10日発行）　通巻322号

人生100年時代　共生社会の生き方情報誌

さあ、言おう

さわやか福祉財団

つながろう、心で　広げよう、笑顔の助け合い！

「地域助け合い基金」で

コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

「寄付」と「活動」で温かい地域づくりを進める基金をつくりました

あなたの気持ちを助け合いの力に活かしませんか？

この基金は、どんな状態になっても、
誰もが安心して暮らせるように地域で助け合うための基金です。
コロナ禍で買い物や食事など生活に困っている方々を助ける
市民活動団体に活動資金を提供して、
まずはコロナ禍をみんなの温かい心で乗り越え、
そして、その助け合いの力が、
平時の生活に戻った後も困った時にはいつでも発揮されるように、
自由で楽しくてしっかりした地域の助け合い活動を築いていきます。
どうぞご支援ください。

（※お振込先は本誌裏表紙、内容は本文をご参照ください）

夢・ふれあい社会
公益財団法人
さわやか福祉財団

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

さぁ、言おう

2020年6月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道
新型コロナウイルス感染症をどう乗り越えるか
「地域助け合い基金」と共生社会
清水 肇子

4 特 集 つながろう、心で　広げよう、笑顔の助け合い！
「地域助け合い基金」でコロナ禍を乗り越えて共生社会へ

10 特 集 コロナ禍を乗り越えて共生社会へ
心をつなぎ、幸せを実感できる地域へ　鶴山 芳子

20 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から
助け合える諫早へ。地域ぐるみで気軽に楽しく生活支援活動を実践
地域共生助け合い隊（長崎県諫早市）

26 看取り・終末期を考える 裏を見せ、表を見せて…
ソーシャルディスタンスの女王、原節子 自立の素顔を「東京物語」に見る　尾﨑 雄

新しいふれあい社会づくりに向けて
● 財団の活動　など
30 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

⑲「地域助け合い基金」助成応募のご案内
㉘『助け合い大全 '19』のご紹介
㉛みんなの広場/投稿募集
㉜さわやかパートナー・『さぁ、言おう』のご案内/表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 近藤　博子

新しいふれあい社会　実現への道

新型コロナウイルス感染症をどう乗り越えるか
「地域助け合い基金」と共生社会

さわやか福祉財団　理事長　清水　肇子

❖ その10万円、どうしますか？

新型コロナウイルスに関する緊急事態宣言が、残された5都道県を含め、5月26日から全面解除となった。しかしその後も、地域によって第2波といわれる感染拡大の兆候が見受けられ、この闘いにはまだまだ長い時間が必要なことを痛感させられる。

お金が回らず、経済的に苦しむ人たちが全国に増える中で、国が採った政策の目玉の一つが現金10万円の一律給付だ。各自治体の窓口の混雑と混乱ぶりが連日報道されているが、困っている人たちに少しでも足しになるよう一刻も早くと願いつつ、しかし半面、複雑な気持ちにもなる。さて、このお金は何のためなのか？

当初は生活に困っている世帯への30万円給付。額や線引きの仕組みに問題はあったが目的は困窮している状態の支援と明確だった。それが一律給付になったことで変わってしまった。額も10万円となり困っている人にとっては大きな減額となった。もちろん、給与を変わらずにもらえている人や、それなりの年金収入を得ている人や世帯であっても、コロナ禍により、自分や家族のための予定外の出費がかさむこともあるだろう。ただ一方で、外出自粛で普段より消

費に回すお金が抑えられている状況もあるから、まさに人それぞれである。12兆8800億円ともなる大型支出。確実に将来世代への大きな足かせとなる借金を積み上げながら、私たちは、これからの暮らしを選択していくことになる。

❖ 目指すは、お互いさまで助け合う共生社会

助け合いは、元々人と人とのふれあいやつながりが基盤だ。その前提が崩され、助け合い活動そのものも多くが休止となり、中には解散となる団体もあった。一方、日々の生活で支援が必要な人たちは、コロナの影響を受けて増加しており、今後ますます増えていくことは間違いない。そうした状況は放ってはおけないと、コロナ禍の中でも工夫しながら活動を続けていたり、今では少しずつ、居場所や通いの場、自宅への見守り訪問や生活支援なども再開し始めている。地域の助け合い活動はまだまだ脆弱であり、これから社会のインフラとして育て上げていくべき不可欠の基盤といえる。ただこれは政策で強制してつくれるものでは決してない。それは人々の気持ちがあってこそ広げていけるもの。だからこそ活動原資は思いを共感した寄付に意味がある。今回の10万円は、そんな新しい社会のありようの礎ともできるものだ。状況が可能な方は、どんな分野でも関心を持てる活動へ何らか寄付として参加し、皆さんの想いを届けてほしい。それが明るい未来を築く大きな力になる。

さわやか福祉財団が今回立ち上げた「地域助け合い基金」も、今のコロナ禍への支援はもとより、将来に向けて、誰もがどのような状態でも安心していきがいを持って暮らしていける「共生社会」づくりを目指している。ぜひ一緒に新しいふれあい社会をつくっていきませんか。

それぞれの地域の助け合いを育てます。皆様からのご寄付をぜひお待ちしています。

つながろう、心で　広げよう、笑顔の助け合い！

「地域助け合い基金」でコロナ禍を乗り越えて共生社会へ

特集

「寄付」と「活動」で温かい地域づくりを進める基金をつくりました

この度、さわやか福祉財団では、「地域助け合い基金」を立ち上げました。この基金は、全国の皆様からのご寄付をもとに、各地の助け合い活動を強力に推進していこうというものです。

新型コロナウイルスの感染拡大により、私たちは当たり前にあった人と人との交流を遮断することが求められました。支援が必要な方の地域における孤立はさらに深刻となり、これまでにも増して助け合い活動が必要という声が全国から聞こえてきています。こうした状況に様々な工夫で応え、その助け合いを今後につなげて、さらに発展させていくことは明るい未来を拓くために決定的に重要であると考えています。

「地域助け合い基金」は、皆様に育てていただく基金です。ぜひ、それぞれのお立場で、それぞれの地域で、可能な形でのご参加をお待ちしています（編集部）。

ぜひご支援ください

気になる地域はどこですか？ 市区町村を指定できる寄付です

4月下旬、さわやか福祉財団では、コロナ禍と全国の助け合い活動の状況を確認するための緊急アンケートを行った。日頃から連携して全国で助け合い活動を展開しているさわやかインストラクター、生活支援コーディネーター等の皆さんにコロナ禍の影響を緊急に尋ねたところ、約100名の皆さんから、やはり相当数の範囲で活動に影響があったとの回答が寄せられた。

地域のつながりが途切れて、行き場がなくなってしまったことにより、フレイルや認知症、うつの進行など心身の機能低下や、引きこもり、さらにはDV（家庭内暴力）の被害など、深刻な状況が発生している。

家族機能が失われつつある現代において、地域力が必要だという意識や取り組みがようやく広がってきた矢先のコロナ禍は、確かに助け合いのあり方に大きな課題を投げかけた。

その一方で、そのような限られた環境の中でも、様々に工夫しながら、地域のつながりを維持し、助け合いの活動を届ける取り組みも広がっていた。

アンケート結果は、続く16ページ以降に簡単にまとめてご紹介しているが、電話や手紙などによる安否確認や元気づけをはじめとして、これまで行っていなかったお弁当の配達や、出前居場所など、ニーズに合わせた新しい活動も生まれている。

こうした地域の状況や、「助け合いの灯をなんとか消さずに維持していきたい」という各地の皆さんの熱い思いを再確認し、当財団としてどのような取り組みができるのか、これからの助け合いの地域づくりをどう進めるかを議論して、この「地域助け合い基金」が誕生した。

新型コロナウイルス感染症の影響は地域によって大きく異なる。また状況は時間と共にどんどん移り変わっていく。そもそも助け合いの活動というのは多様多彩な取り組みであり、活動への支援は地域のニーズを踏まえ、特色を生かしたうえで、柔軟な対応や即応性が求められてくる。

本基金では、市区町村（区は東京都の特別区）ごとの指定が可能な寄付とし、また、当分の間、コロナ禍対応支援を優先することとした。今皆さんがお住まいの自治

体はもとより、自分の生まれ育ったふるさと、応援したい地域など何でも構わないし、もちろん、全国の必要な地域で活用してもらいたい、というご寄付も大歓迎。お一人お一人そうした思いを、広く皆さんにお伝えできるよう、「ひと言コメント」の応援メッセージもホームページでご紹介できるようにした。

思いを活動に届ける 心に染みる皆さんからの応援メッセージ

早速、ご寄付をお願いし始めたところだが、温かい応援メッセージが寄せられている。そのうちのいくつかをご紹介したい。

村田　幸子さん

福祉ジャーナリスト

コロナ禍による被災状況は、人さまざま。
経済的な損失を被らなかった私にも、給付金が。
はて、何に使ったらこのお金は活きるだろうか。
＜地域や、地域で活動する人たちが疲弊しないように＞
こう決めたら、10万円をもらう気持ちがスッキリした。
膨らませよう、地域助け合い基金！

中村　秀一さん

一般社団法人医療介護福祉政策研究フォーラム　理事長

コロナ禍でこれまで当たり前と思われていた日常生活がいかに大切であるかを痛感しました。自粛生活を通じ、人々の連帯が社会を守ることも再確認しました。コロナ後の世界はこれまでと同じではありえません。人々の支え合いがこれまで以上に必要となります。「地域助け合い基金」に賛同し、また、大いに期待します。

村田さんは、賛否両論あるコロナ給付金の一律10万円の使い道を明快に示してくださった。

また、中村さんは、厚生労働省時代に、地域包括ケアの考え方を国として打ち出した方だ。ますます支え合いが必要になるというコメントに、大いに力づけられる。

さらに、匿名ご希望だが、若い高校生からも親御さんと一緒のご寄付が届けられた。

まだ高校生の私には、社会のためにできることは限られていますが、今できることを少し考えてみました。大変な世情に無力感マックスですが、寄付したいと思った

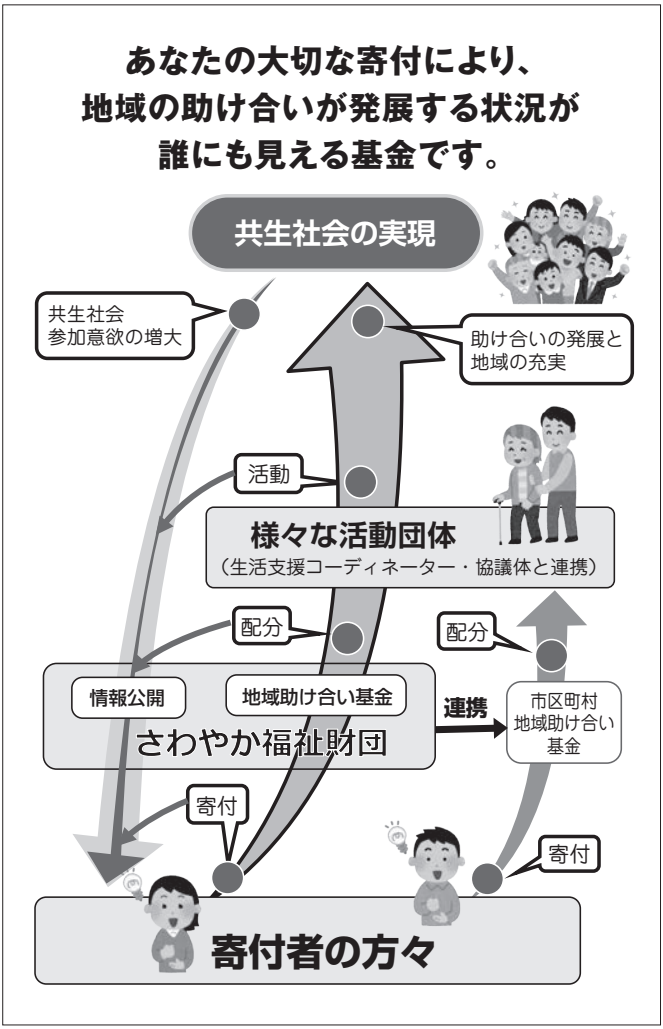
自分は、これまでの私よりまあまあマシかなと思えてきて嬉しくなりました。

コロナ禍を通じて、若い世代が社会を考えるきっかけとなり、考えた使い道が地域の助け合い活動への支援につながる道を選んでくれたことは本当にうれしい。

こうして寄付いただいた皆様の思いを地域で助け合い活動を行っている方々につなぐのが当財団の役目。その活動で、どんな状態になっても、誰もが安心して暮らせるような地域づくりを全国にどんどん広げていきたい。

皆さんの大切な寄付により地域の助け合いが発展する状況が誰にも見える基金です

「地域助け合い基金」は、単にコロナ禍での困り事を支



援するだけではなく、コロナ禍をみんなの温かい心で乗り越え、平時の生活に戻った後もさらに「新しい生活」の中で、しっかりと助け合いが根付いていくことを期待している。従って、本誌でこれまで報告してきている全国の生活支援コーディネーターや協議体の取り組みともしっかりと連携していけるよう育んでいきたい。

そしていずれ将来、この基金の思いを共有してくれる市区町村が出てくることを期待している。当該市区町村で、住民の方々が参画して独自の基金となる受け皿をつくってもらい、寄付や配分、活動推進について地元主導で進めてもらう構想を持っている。地域の助け合い活動の支援は、共生社会がしっかりした生活文化として確立するまでに数十年にわたり着実に行っていくことが必要になる。それぞれの市区町村で他の財源も加えながら、よりきめ細かな配分を行っていくことが効果的と期待している。その場合も当財団はもちろん連携しながら、全面的に協力し、地域毎の特色ある助け合い、共生社会づくりが進むよう支援していきたいと考えている。

皆様の思いに支えられて発展していく「地域助け合い基金」への応援をぜひお願いいたします。

「地域助け合い基金」の特長
皆様のご寄付を得て、地域の助け合い活動を助成します

○ご寄付は常時お受けします。また助成も随時実施します。

○ご寄付の状況、助成の状況は、常時当財団ホームページで公開します。助成応募額が寄付額を上回る場合は、その状況を広く訴えてさらなる寄付を呼びかけます。

○情報公開を重要な柱とし、ご寄付で助成した活動の報告はすべての団体の取り組みをホームページでご紹介します。

○寄付・助成及び助成した活動の状況について疑問がある場合の窓口を設けています。公正中立の立場で川村百合弁護士が対応します。

○本基金の資金管理状況について、専門的立場から、出塚会計事務所に監査をお願いしています。

○さわやか福祉財団として、本基金設立時に、3000万円を拠出しました。

○ご寄付額から、当財団の間接経費は一切いただきません。利益相反の立場から、疑問をお受けする窓口、資金管理状況の監査にかかる費用はご寄付額からお支払いしますが、それ以外は全額、助け合い活動のため各団体に提供（助成）します。

ご寄付のお申し込みについて

1．寄付金の使途　次の助け合い活動の支援に活用させていただきます

◎コロナ禍対応助成

Ⅰ　コロナ禍により被った助け合い活動の被害額の支援（活動関係者が自ら補填する額）
活動を引き続き実施または継続を予定する場合。
2020年２月１日に遡った申請が可能。

Ⅱ　コロナ禍により生じた生活上の不便・不安を解消するための助け合い活動
申請時から概ね１か月以内に実施する取り組み（準備でも可）

◎共生社会推進助成

Ⅲ　地域の助け合いを維持・発展する活動（新たに団体を設立する場合、または新たに活動を広げる場合等）
申請時から概ね６か月以内に実施する取り組み（準備でも可）

2．税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収書が必要となります）。

3．ご寄付の方法

（1）銀行振込によるご寄付

三井住友銀行　浜松町支店　（普通）　口座番号　７８５９４５２
三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　（普通）　口座番号　００９５４４６
（口座名義 ※いずれも同様）
公益財団法人さわやか福祉財団　地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

（2）郵便振替によるご寄付

（口座記号番号）　００１１０－７－７０９６２７
（加　入　者　名）　公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名 (区は東京都の特別区）と、ひと言応援コメントなどをご記入ください。

■助成応募の概要については、19ページをご参照ください。

いずれも詳細は、当財団ホームページでご紹介しています。
「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

心をつなぎ、幸せを実感できる地域へ

さわやか福祉財団理事・新地域支援事業担当リーダー　鶴山　芳子

人と人とがふれあいつながる居場所など助け合い活動が相次いで休止になり、3か月以上。各地で「行くところがない」「寂しい」「モチベーションが下がった」と心の叫びが聞こえる。そのような中、全国の助け合い活動の皆さんは、「新型コロナでの中止、延期をどう乗り切ったか、いろいろな知恵を出し合うことは大事なことであり、今、学ぶ時でもある」と冷静だ。地域の声を聞き「何ができるか」と話し合いを始めている。「原点に返り考える」「動き出すと新しい気づきがある」と、気づきや地域の声に応え、新しい活動も始まっている。それは柔軟でしなやかで、そして、とても素早い。「ほっとけない」と心が動いて始まった本物の活動の特徴でもある。コロナ禍で一旦休止せざるを得ない時を経て、状況を見極め、自分たちの立ち位置をあらためて確認しながら、助け合い活動は動き出した。

心のつながりはお金では買えない

〝いつでも誰でも型〟の居場所は不特定多数、特に高齢者や障がい者の参加も多い。子どもたちも認知症者も役割を持ちいきいきとしている。しかし、その場はほとんどが休止した。だが、すぐに「どうし

ているんだろう」と会えなくなった人たちの顔を思い浮かべながら電話で声を掛け合った。感染者が出ていない地域では、一人暮らし高齢者宅を訪問し声を聞いた。不安を抱えて暮らす方も多かったことであろう。玄関先で「『気にかけてくれてうれしい』という声に、こちらもうれしかった」とつながりは強くなった。「寂しさの解決はお金では買えない」「休止になって、居場所や助け合いの必要性を実感した」と多くの皆さんが話してくれた。

助け合い活動の楽しさは口コミで広がり、多くの参加と応援が地域から集まっている。「手伝うよ」と得意分野での労力の応援はもちろんだが、野菜やお米、さまざまな品物やお金での寄付の応援もある。「うちのおばあちゃんは居場所のおかげで96歳まで元気で過ごせました。本当にありがとうございました」と亡くなった女性のご家族から感謝の気持ちと寄付が届いたというエピソード。助け合い活動は当事者だけでなく、その家族にとっても地域になくてはならない大切な存在である。

ピンチをチャンスに！そして、コロナ禍で見えたもの

4月末、長崎県川棚町の藤田直子さん（「井戸端みんなでワハハ」代表）からメールが届いた。「今が踏ん張りどころ、このしんどい時期をみんなで乗り越えましょう。長いようで短かった、短いようで長かった7年半。50代の主婦たちが『何か楽しいことができないか？』と始めたコミュニティサロン。元気をお裾分けできないか、少しでも社会貢献できないかと一つひとつ想いをカタチにして来ました。地域の皆さんが楽しんでくれたことが本当に良かった。生き方が試されているように感じる今日この頃、自分たちに合った方法で活動に挑み続けます。拠点はなくなりますが、勇気ある行動で夢をかなえていきます。支えてくださってありがとうございました。これから第2章の幕開け、これからも末永く応援よろしくお願いします。感謝を込めて　スタッフ一同」

驚いて連絡をしたら「3月から休止で家賃が払えない。苦渋の決断だった」と。しかし、その声は明

るく、「仲間と新しい活動に向かっている」と、その前向きさに驚かされた。

長崎新聞　2020年（令和2年）5月11日　月曜日　紙面編集・新口鮎美

集い笑う〝居場所〟休止に

いつかまた「みんなでワハハ」

東彼川棚町の主婦らで運営するコミュニティーサロン「井戸端　みんなでワハハ」が4月末で、いったん活動を休止した。地域の老若男女が集う「居場所」だったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で存続が難しくなった。スタッフは「第2章の始まり」と前向きにとらえ、再出発を誓っている。

いまを生きる　長崎のコロナ禍

川棚の主婦ら再出発誓う

8日午後、百津郷にあるワハハのサロンではスタッフが後片付けに追われていた。毎週月、水、金曜日に人々が食事やおしゃべりを楽しんだ部屋から次々と荷物が運び出される。「だいぶ色が薄くなったね」。目に焼けた看板を見上げて、代表パッドや新聞ちぎり絵講座などを開いた。

女性の地域活性化を支援する県の補助事業を活用し、藤田さんら主婦仲間がろ01a年に開設。地域の高齢者らに昼食を提供し、iPad（アイ

イベントやワークショップ、絵はがき販売などで収入を得て、県補助から自立、自閉症啓発キャンペーンや熊本地震の被災地支援など「井戸端」ならではの発想で活動を広げてきた。しかし、新型コロナの影響でサロンの維持が困難に。収束の見通しが立たない中、一度サロンを畳もうと決めた。

藤田さんは「生活そのものに苦しんでる人に比べれば…」と気丈に話す。それでも利用者や通行人からは休止を惜しむ声が多く寄せられた。「老いも若きもみんなで笑おう」。当初掲げた目標通り、人々にとってのかけがえのない「居場所」に育っていた。

県内の市民活動をサポートする中間支援組織「F-Ｎｅｔ（ネットワークながさき）」が4月に県内のＮＰＯ法人や市民団体に行った調査では、9割以上が新型コロナで活動に影響が出たと回答。山本倫子代表理事は「地域で『居場所づくり』に取り組むボランティア団体が機能を失い、社会にほころびを生む可能性がある」と指摘する。

片付け中もスタッフは「転んでもただでは起きないと終始笑顔だった。藤田さんは『一人一人の生き方が試されている気がする。これからも私たちらしく、楽しいことに挑み続けたい』と胸い立つ。人々が集い、語らう日常は、いつかまた戻る。その時には思いきり笑おう。みんなでワハハ、と。」（六倉大輔）

みんなでワハハ　TEL 0956/82-2039

再出発を誓い、笑顔を見せる「井戸端　みんなでワハハ」のスタッフ＝川棚町（撮影のためマスクを外しています）

川棚町の再出発を伝える新聞記事（提供：長崎新聞社）

常連さんたちの家をまわり、閉じることを伝えた時、予想外の反応があった。残念がる声とともに「我が家の空いている部屋を使ってほしい」「広告宣伝費で応援するよ」との応援が返ってきた。また、息子さんと離れて暮らす一人暮らしの高齢の女性から「もしもの時はこのポストに鍵があるから遺骨を受け取ってほしい」との話があった。「遠くの親戚より近くの他人」と藤田さん。週3日の居場所でのつながりは、とても大きな信頼を育んでいた。

コロナ禍の今、家族のような強い絆が地域で築かれている。誰もが寂しいと思うことがあり、困っても助けてと言いづらい社会。誰にでも信頼できるつながりが地域にあることは、今後ますます重要だと実感した。

「新型コロナ防止のため居場所は2月末から休業に入った」と静岡県袋井市の稲葉ゆ

緑の芝が広がる広い庭で「青空居場所」

り子さん（「たすけあい遠州」代表）。

3月に入ると、気になる方のお宅へ手作りの昼食を持参して複数で出向く「出前居場所」を始めた。玄関先で布を広げて食事を並べ、語らいながら食べる。時には「外で食べよう」と誘って公園で食べるなど。

また広い庭で「青空居場所」を実施。春の日差しと心地良い風を、離れた空間の中で楽しむなど。「ピアノ演奏もあったのよ」という電話の声は弾

手作りのごちそうを前に「移動居場所」が始まる

んで聞こえた。

そんな中、「このまま家賃を払い続けたら、寄付をしてくれている皆さんの気持ちを無駄にしてしまう」と20年以上続けてきた居場所「もうひとつの家」を今回（5月）、閉じることにしたという。片付けをしていると、「やってる？」と通り掛かりにのぞく人がいたり、「いつから始まる？」と電話が鳴ったりする。

5月中旬、新しい活動が始まった。「こんな時、相談できて、やってみようと一緒に動き出す仲間がいるのが幸せです」と稲葉さん。長年一緒に活動してきた仲間たちの共感と結束力、そして機動力はお見事で、潔い心意気を感じた。「人に喜んでほしい」という気持ちが原動力であろう。食事を届けることや日常生活支援の活動があらためてスタートしたという。

心と心のつながりを切らずに私たちに何ができるか

「活動を再開したいが、家族が不安という声もある」「〝3密〟を避けてどのようにしていくか、活動を見直してみたい」。コロナとの共生、新しい暮らしに合った活動が始まっている。

大阪府門真市の「かどま折り鶴12万羽プロジェクト」は、緊急事態宣言が解除された後、6月から会館予定の市民文化会館のエントランスに飾る折り鶴のオブジェを、市民総出で作ろうという夢のあるプロジェクトだ。「おうち de 折り鶴　つない de アート」と題し、市民団体「ゆめ伴（ともの）プロジェクト in 門真実行委員会」が呼び掛けてNPO法人らが連携し、チームで推進。外出自粛が続く中、家族との交流や高齢者の体力や認知機能の低下を防ぐこと等が目的。「気持ちをつなぎたい」と角脇知佳さん（「ゆめ伴プロジェクト」代表）。鶴を折って、みんなで大きなオブジェを作る。どんなオブジェになるのか想像し、心と心をつなぐステキな取り組みだ。角脇さんは「会えないけど仲間がいるという心のつながりを大事にした活動を始めていきたい」と話してくれた。

新潟市の地域包括ケア推進モデルハウス「実家の茶の間　紫竹」を運営する河田珪子さん（地域の茶の間創設者）は、「つながりを切らないために」と構想を立てていた。紫竹には、参加費300円が6枚綴りで1500円の参加券であり助け合いチケットでもある（実家の手）がある。電話での声掛けをしながら3か月となる頃、そのチケット代を全額お返しすることを呼び掛けた。「お変わりありませんか」と声を掛け、地域ごとに少ない人数でわずかな時間だが顔を合わせる機会をつくる。返金しながら、「どんなことをしたいか、望んでいることをうかがい、感染症と共生する新しい実家の茶の間をみんなでつくっていきたい」。そして、「目的は地域で助け合って生きていくこと」とブレない。コロナ禍でも助け合う姿が、チケット回収で見られたそうだ。「誰もが孤独感を持ちながら、でも、見守ってもらっているというつながりは生きている。このつながりは1日でできたものではない。心と心のつながり、誠実に付き合ってきた信頼関係を大切にしたい」と河田さん。3密を避け、久しぶりに顔を合わせる皆さんは、コーヒーを飲みながら話せば切なさや本音が聞こえてくるかもしれない。「その声をしっかり聴き、そして、本人たちが何をしたいのか探し出していきたい」。そして、コロナと共生するこれからも「目的を共有し、実践する仲間たちや、地域の皆さん、応援してくださる方の力の大きさがあればこそ」とこれまで築いてきた絆を大切にしながら、新しい活動が始まる。

＊　＊　＊

人と会えない寂しさ、先が見えない不安。だから、地域でつながる関係は大切であり、助け合い活動で温かい人と人との絆が育まれている。本物の助け合いは、困難にひるむことなく、しっかり前を見据えて動いている。そして、新しい気づきや心動いた人から新たな活動が始まり、「ありがとう」という関係が広がっている。一人ひとりが幸せを実感できる地域を一緒につくっていきませんか。

コロナ禍と全国助け合い活動の現状

緊急アンケート調査結果より

今できることを考える

さわやか福祉財団では4月末に、当財団と連携して全国で助け合い活動を展開しているさわやかインストラクターおよび生活支援コーディネーター他（推進パートナー）の方々にコロナ禍の活動への影響について緊急アンケート調査を行いました。その結果、全国約100名の方々から、現場の実態について回答をいただきました。

ここでは、回答結果の概要とともに、外出がままならない中でも工夫して助け合い活動を行っている例を中心にご紹介します。

【回答結果の概要】

◇居場所、通いの場など、住民が集まって行う助け合い活動の9割、住居を訪問して対面で行う助け合い活動の3割は、コロナ禍のためやむを得ず活動を休止している。その他の団体で一部の参加者から生活維持上の強い必要性に基づく要望があって活動を続けているところも、活動規模を縮小している。

◇多くの団体は、対面できなくなった参加者が生活意欲を喪失しないよう、電話による個別相談や励まし、弁当・食事の配布、買い物代行、チラシや冊子の配布による情報提供などの支援活動を続け、心身の状況悪化の防止に努めている。

◇助け合い活動者らは、対面しての助け合い活動が途切れる間に、これまで培ってきた住民の助け合い活動参加の機運が消滅することを非常に心配している。

◇住民の寄付や参加費用負担で活動を展開してきた助け合い団体は、家賃や活動経費の負担に苦しんでおり、これに対する資金援助を望んでいる。

◇多くの団体がコロナ禍収束後の助け合い活動の復活、伸長を見据えた資金援助や活動支援を望んでいる。

こんな工夫をしながら活動しています

＜電話等による見守り＞

・電話での声かけ・安否確認、手紙での元気づけ

・近隣の行政の日常生活支援体制状況のアンケート調査を行い、情報を共有中

・ハガキでの安否確認＆アンケートを検討中

・定期的に様子を伺っている。訪問した際には、マスク・レトルトごはん等を届けている

・利用者には、ＳＮＳを使用しての報告

＜手作りマスク等の配布＞

・医療従事者に雨ガッパを送ろうプロジェクトを実施

・手作りマスクの販売やキッチンカーを呼んでの買い物の場づくりの継続

・フレイルに関するお知らせポスティング

＜食事の配布＞

・ワンコイン弁当の配達、安否確認

・お弁当のほかに誕生日プレゼントを配ってます。またいろいろな理由をつけて玄関まで訪問しています

・集まることは中止していますが、配食と生活支援の訪問は変わらず続けています

・3月から、出前居場所（2人が各自宅で手分けして昼ごはんを作り、高齢者宅へ伺って、話す、食べる）を週2回、一人暮らしのお宅や高齢世帯で。会いたいという人を連れていく時もあります。土曜日はカレーライスや焼きそばを20人分ほど作り、2、3人で高齢者など気になる人へ届けています

＜買い物支援、移動支援等の個別支援＞

・住民ボランティアが担っている病院の送迎（社協事務局移送サービス）に関して、現在、ボランティア運転手は活動休止中であるが、社協内で福祉有償運送運転者講習修了証を取得している職員が業務対応にあたっている

・サロン・集いの場は休止中ですが、在宅生活支援サービス・移動サービス支援活動は継続して提供している

・老老介護の家庭の支援、保健所やホームドクターへの状況報告、土日の薬や、状況の管理、近くを

通ったときに安否確認

＜冊子やチラシの作成、配布＞

・自宅でできる体操の動画を市のホームページで見られるようにし、ケーブルテレビで紹介してもらった。ボランティアが作成した脳トレドリルを高齢者に配布する郵送代を補助金の経費にできるようにした

・文書郵送により普段の生活で意識することや運動方法などを周知

・全世代対応型の小冊子（自宅で行える体操・脳トレ問題・子ども向けの塗り絵と間違い探し・口腔ケア体操など）を連休前に村内全戸配布予定です。これまでは集まることに主眼を置いていたので、発想を転換して様々な事業展開を行っていきたいです

・通いの場の活動継続への相談対応やチラシによる通いの場（参加者）への情報提供（感染予防やフレイル予防対策、自宅でできる体操など）

・集いの場利用者に注意喚起のチラシと家でできる体操のパンフレット配布

・生活不活発病予防を啓発する記事を市広報に掲載。通いの場を開設するグループには、自宅でできる運動を記載したチラシを個別に送付

・高齢者を対象にした感染予防、フレイル予防のリーフレットを作成し、健康増進課作成のリーフレット（予防、自宅でできる筋トレ）と合わせて配布。また、マスクを作成し、まち協、市老連、民協、婦人会役員に贈呈した

＜活動を継続もしくは縮小して継続＞

・最近は「居場所」を半日開けています。居場所のある地域で市第1号の感染者が出たため、まずもって感染拡大しないことが求められたが、「居場所」があることで情報の共有ができる事もあり、住民にとって「つい立ち寄る場所」となった

・活動は中止せず、必要なサービスはずっと続けてきたが、地域では近隣の助け合いと見守り、そして、地区民の気にかかる人への心配りが広がり出した

つながろう、心で　広げよう、笑顔の助け合い！

「地域助け合い基金」でコロナ禍を乗り越えて共生社会へ

【助成応募のご案内】

1.期　間　常時実施。ご寄付残高の範囲で、配分は随時行います。

2.助成の対象活動と配分額等　地域で暮らす人同士の助け合い活動（つながりづくりを目的とした居場所・通いの場を含む）

- 高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、外国人、ケア家族の支援他、特定分野の制限はありません。ただし、日本国内の活動に限ります。

◎コロナ禍対応助成（当分の間、優先配分）

Ⅰ　コロナ禍により被った助け合い活動の被害額の支援　**上限の目安 20万円**

（活動関係者が自ら補填する額）

- 活動を引き続き実施または継続を予定する場合。
  2020年２月１日に遡った申請が可能。

Ⅱ　コロナ禍により生じた生活上の不便・不安を解消するための助け合い活動

上限の目安 10万円

- 申請時から概ね１か月以内に実施する取り組み（準備でも可）

◎共生社会推進助成

Ⅲ　地域の助け合いを維持・発展する活動　**上限の目安 15万円**

（新たに団体を設立する場合、または新たに活動を広げる場合等）

【選考のポイント】

- 住民相互の助け合い活動を推進することにより、地域共生社会に資する活動であるかどうかを確認

3.対象団体・グループ等　非営利の組織であること。法人格の有無は問いません。
個人の活動以外申請できます。

4.対象となる費用　特に費目の制限はありません。
活動に必要な、人、モノ、場所などの費用を支援します。

5.応募方法　当財団ホームページの「助成応募要領」で詳細ご確認のうえ、申込書及び必要添付書類をメールまたは郵送にて当財団までご送付ください。

〒105-0011　東京都港区芝公園2-6-8　日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団 「地域助け合い基金窓口」
送付先メールアドレス：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

6.その他　地域の生活支援コーディネーターと、助成応募時の推薦、あるいは、助成を受けた活動の報告の提出時の連携をお願いしています。また、助成した活動の報告内容については、ホームページや冊子等で公開させていただきます。

※助成応募の詳細と併せて、いずれも詳しくは当財団ホームページをご参照ください。
※関連記事→本誌P2～ご参照

助け合える諫早へ。地域ぐるみで気軽に楽しく生活支援活動を実践

地域共生助け合い隊（長崎県諫早市）

高齢者らの困りごとなど、行政の手の届きにくい部分を元気なおばちゃんパワーでカバーしようと、長崎県諫早市飯盛地域の女性有志が立ち上げた「地域共生助け合い隊」。市が地域包括ケアシステム構築の一環として、市内全19地区で支え合いの組織づくりを目指す中、その取り組みは先駆け的なモデルになりそうです。

（取材・文／城石　眞紀子）

始まりは、地域の将来を憂う1人の気づきから

長崎県中央部にある諫早市。その南部に位置する飯盛地域（飯盛町）は、南に広がる橘湾、シンボルである飯盛山、広大な畑作地帯を有し、気候は一年を通して温暖。豊かな自然と交通アクセスなどバランスの取れた都市環境にあるが、近年は人口減少と少子高齢化が進み、人口約7200人のうち65歳以上が約34％を占めている。

こうした状況の中で、安心して暮らせる町づくりを目指して女性有志が立ち上げたボランティアグループが「地域共生助け合い隊（助け

合い隊）」だ。発起人であり代表を務める藤本八重子さん（70歳）は、２００４年に「地域演劇で町づくり実行委員会」を発足。方言を生かした独自の地域演劇を確立し、地域の歴史を紐解く物語や現代の地域が抱える課題をテーマに公演を行い、演劇を通しての地域活性化や町づくり、人づくりに尽力してきた経歴を持つ。

「私は34年前に、子どもたちの健全な育成を図るＰＴＡ活動の一環として、夢多き子に育ってほしいと人形劇を始めて以来、文化事業を通して地域と関わってきました。それは、この町が好きで、ここに住んでよかったと実感できる町にしたいという思いがあったからです。でもあるとき、はたと疑問が生じたのです。人口減少や高齢化がどんどん進んでいく中で、いつまでも文化事業ばかりをやっていていいものだろうかと」

医療や介護、生活支援など、高齢者らが抱えるさまざまな問題は、以前から耳にはしていた。また、同地域には鉄道は通っておらず、唯一の公共交通機関のバスも1時間に1、2本程度。車がないと買い物にも通院にも窮し、高齢者は外出もままならないなどの地域の実情も見聞きしていた。

「でも自分はまだ元気だし、どこか他人事というか、ピンとこない部分がありました。ところが3年ほど前に腰を悪くし、今まで何事もなくやってきたことが何ひとつできなくなりました。治療院に1年ほど通ってなんとか元通り歩けるようになったものの、年を取るとはこういうことなのかと実感。また、母の在宅介護も経験し、その大変さも身をもって知りました。自分がつらい目に合うと人の痛みがよくわかるようになるものです。それで、元気になった今のうちに、みんなで助け合えるような関係を築いておきたい。これを自分の地域活動の集大成として取り組もうと思うに至ったのです」

長年、地域づくりに携わってきた代表の藤本さん

仲間を募って地域づくり事業をスタート

それからの行動は早かった。賛同者を募りながら、共通理解を得るための素案を作成。

「長年地域で活動してきたので、幸い、仲間はたくさんいました。その仲間たちに、いつまでも歌ったり、踊ったりしてる場合じゃないよと（笑）。『これからみんな年を取っていくんだから、最後の最後は自分たちでなんとかしていかんばいかん。子どもにも頼ってばかりはおられんし、子どもだってあてにはならん。やっぱり、隣近所で助け合う仲間が必要じゃないの。そのため

にもいざというときに〝助けて〟と言えるような組織をつくろうや』と声掛けをしたところ、みんなも『そげんね、そげんね』と賛同してくれました」

そして、当時藤本さんが会長を務めていた「飯盛地域づくり協議会」にも働き掛け、これまでのイベント中心の活動から住民の生活支援策への転換が必要と訴え、協働を願い出た。

「その結果、役員会で了承を得て、18年度予算の中から設立準備金として10万円の交付金をもらえることになりました。それを事務費に当て、地域の実情や困りごとを把握するために、高齢者ら約300人に対するアンケート調査も実施。自治会や民生委員、特別養護老人ホームなどとも連携し、情報交換や勉強会にも取り組みました」

そして、同年9月に発足会を開催。同地域内の17地区、40～80代の女性73人が助け合い隊に登録をし、有償ボランティアによる助け合いを開始したのであった。

ワンコインでの助け合い

助け合い隊の活動は、6つの理念に基づいて行われている。

1つめは、自分の利益のためではなく、誰かのために役に立ちたい。2つめは、自分の経験や能力を生かした仲間づくりと生きがいづくり。3つめは、困ったことがあればみんなで助け合い、お互いさまの関係を築きながら豊かに人生を生きる。4つめは、家事代行サービスではなく、有償の助け合い活動である。5つめは、内容の変更は要望に応じて対応する。6つめは、活動中に困りごと、相談ごとが生じたときは全員で解決策を講じる。

「行政でできることは行政で、社協でできることは社協でしてもらう。自治会長さんや民生委員さんにもそれぞれの役目がある。それ以外の狭間の部分を助け合い隊で補っていければと思っています。登録者は現在89名となり、

草取りや片付けなど、
ちょっとした困りごとを支援

昨年度の実績では約70件の依頼がありました。庭の草取り、買い物の手助けなどのニーズが多く、病院への送迎もボツボツやっています。車での送迎は何かあったときのことを考えて、当初はできないという取り決めをしていたのですが、『どうしても頼まれるけん、やってもよかよ』という人が何人か出てきて、それならば本人の了解のもとに行動してくださいということにしました。また、認知症の方の家の中の片付けや清掃も毎週1回行っています。このお宅にはヘルパーさんが入っていますが、介護保険ではできないところを私たちでサポートしています」

気軽に利用してもらえるよう、ワンコインでの助け合いということで、利用料金は1時間500円。ただし、ごみ出しは10円から。

「それも柔軟な対応にしていて、ご近所の知り合いとかで、『ごみ出しくらい、お金はいらんよ』ということであれば、それでいい。でも、依頼する側が無料でずっとお願いするのを気兼ねするようであれば、ワンコインは介在していたほうがいいだろうということで、一応10円からに設定しています」

利用者からは「助かった」との声が多く聞かれ、リピーターも少なくない。

「1回や2回のことじゃないので、謝礼を受け取ってもらったほうが気兼ねなくお願いできる」と、有償に対する理解も深まっている。

気軽に利用できる住民の交流拠点を開設

さらに昨年6月には、月の港の干拓で有名な開新田が一望できる景勝の地に位置するいいもりコミュニティ会館内に、住民の新しい交流拠点「コミュニティサロン」と事務所も開設。

「つながりを深めるためにも、みんなが集える拠点をつくりたいというのは、発足当初からの念願でした。同会館の文化ホールは、演劇の上演で利用させてもらってきた勝手知ったる場所。1階のロビーの一角に休憩スペースがあったので、そこを貸してもらえないかと1年がかりで交渉し、実現にこぎつけました」

サロンには、コーヒー店を模した木製のスタンドを設置。穏やかに語り合える空間にしようと、会員がテーブルやいすのカバーを手作り。無料でコーヒーを振る舞うほか、弁当などの持ち込みもできるようにした。

「開催日は毎週火曜日の午後。新型コロナウイルス感染拡大前は、毎回5～20人ぐらいの利用がありました。この周辺にはお茶を飲める店が1軒しかないので、散歩がてら立ち寄ったり、お稽古事などの帰りにお仲間と一緒におしゃべりしに来たり、縫い物や手芸を楽しんだりするグループもいます。このサロン活動を通して、仲間づくりや生きがいづくりを進めるとともに、情

開設式には会員らが参加して門出を祝った

コーヒースタンドでは
豆から挽いた無料のコーヒーが振る舞われる

「活動の実績が認められて、今年度は飯盛地域づくり協議会から8万円の交付金をいただきます。足りない分は自分たちで手づくり作品などを販売し、補てんしていくつもりです。資金がないので本当はコーヒーも1杯100円で販売したかったのですが、保健所の許可が下りなかったので、苦肉の策で募金箱を置きました。おかげさまで、皆さんからの寄付でサロンの運営も成り立っています」

大切なのは自ら動くこと。そして地道に続けること

生活支援活動を始めて1年半余り。諫早市では前例のない活動だったが、地道に積み重ねてきた成果が徐々に周知され、新聞で取り上げられたり、行政や医師会などからも「がんばっちょるね」と、少しずつ認めてもらえるようになってきた。

「各地区の自治会の集まりにも定期的に報告しているので、最近では自治会長や民生委員さんからも『こんな人がいるんだけど』と相談をいただくことも出てきました。また、生活支援コーディネーターさんとも連携しています。市の事業や介護状況についてよくご存じなので、情報交換をしながらネットワークをつくり、飯盛地域全体をカバーする大きな仕組みができればと思っています」

新型コロナの影響でサロンは休止中だが（4月末現在）、生活支援活動はニーズに応じてできることを行っている。藤本さんは「大切なのは、この火を消さずに情熱を持ち続けること」と報交換や困りごとの相談ができる場としても発展させていければと思っています」

事務所は、同会館内にある地区社協の事務所から机1つを借りて電話を引いてもらい、人件費がかからないよう、転送システムを使って対応。それでも基本料金と電話代、水道光熱費など、拠点の運営・維持には経費がかかる。

言い、この状況でもできることをしていこうと隊員に呼び掛けてマスク作りを行い、700枚以上を特別養護老人ホームや市に寄付した。

「マスク作りひとつでも目標ができると励みになるし、電話やメールで連絡を取り合うなど、つながる機会にもなるじゃないですか」

助け合いや居場所づくりを始めたいと思っても、環境が整わない、資金がないなど、さまざまなハードルがあることだろう。しかし、とりあえずはできることから動いてみる。そうすれば、少しずつでも周囲の見る目も地域も変わってくることを助け合い隊はその活動の軌跡で教えてくれているように思う。最後に、今後の抱負についても聞いてみた。

「あせらず、慌てず、諦めず、しっかりコツコツ5年、10年と活動を継続して、それを若い人たちに受け継いでいってほしい。そのためにもまず私たち自身が、人様におんぶに抱っこではなく、元気なうちは体も心も動かして、年寄りはこぎゃんして生きているというお手本を見せていかないと。そして、お互いに助け合える活動で、年を取っても豊かに暮らしているよねと言えるような地域にしていくのが目標であり、理想です」

「今できることを」と、
緊急事態宣言中もマスクを手作り

地域共生助け合い隊

地元ならではの地縁を生かして、誰もが自分らしく生活しながら、老いも若きも地域で暮らす安心感と、共に助け合う地域ぐるみのまちづくりを目指して活動するグループ。主な活動内容は、①有償の助け合いによる生活支援活動（話し相手、食事作りの手伝い、買い物の手助け、家の中の片付け・清掃、庭の清掃・草取り、病院へ付き添い、ごみ出し、洗濯・物干し、緊急時の子どもの預かりなど）。②住民の交流拠点となる「コミニュニティサロン」の運営など。①の利用料金は500円／1時間（ごみ出しは10円から）。活動をサポートした隊員は、謝礼として同額を受け取る仕組み。②の利用日時は、毎週火曜日13～16時。

●連絡先／〒854-1112　長崎県諫早市飯盛町開1677-1
いいもりコミニュティ会館　TEL 0957-48-1300

看取り・終末期を考える

裏を見せ、表を見せて…

ソーシャルディスタンスの女王、原節子 自立の素顔を「東京物語」に見る

尾﨑　雄

華やかだった過去の人生を見きって、世間との付き合いを絶つこと50余年。酒もタバコも嗜みつつ、95歳まで生きぬいた女性をご存知だろうか。女優・原節子こと會田昌江さんだ。生きていたら、この6月17日で満100歳になる。東京の神保町シアターは生誕百年を記念して「映画女優・原節子―輝きは世紀を越えて」と銘打ち、代表作16本を上映するはずだったが、新型コロナウイルスによって中止となり、原節子ファンをがっかりさせた。

上映を予定されていた小津安二郎監督の「東京物語」は、英国映画協会の「史上最高映画ベストワン」に選ばれている。巨匠小津は「親と子の関係を描きたい」と製作意図を公言し、観客もそこに共感した。だが、蔭の主役を演じた原節子の思いはそうではなかった。

――地方暮らしの70歳と67歳の老夫婦が、東京で所帯を持った息子や娘らを訪ねるが、歓待は上辺だけで、家族の絆の儚さが身に沁みる。そのあげく、老母は帰郷の途中で倒れ、まもなく帰らぬ人になった。家族の解体を60年以上も前に予言し、社会的な評価も高いが、それは作品の一面でしかない。原節子が映画を介して女性の自立を主張したという画期的な作品である。

上京した老親に「日常」の暮しのリズムを壊された実の息子と娘は、老親の世話を、戦死した次男の嫁、紀子（原）に押し付け

おざき　たけし
老・病・死を考える会世話人
1942年生まれ。元日本経済新聞編集委員。認定ＮＰＯ法人コミュニティケアリンク東京副理事長・日本死の臨床研究会会員・さわやか福祉財団評議員ほか

る。舅と姑は実の息子らよりも世話をしてくれた嫁に心から感謝しつつ再婚を勧める。すると、紀子は遠慮しながらも、キッパリと答える。「一人でいたら一体どうなるんだらうなんて、ふッと夜中に考へたりすることがあるんです。一日一日が何事もなく過ぎてゆくのがとても寂しいんです。どこか心の隅で何かを待ってるんです。――猾いんです」。その口調と眼差しには、当時の日本女性の気持ちが籠められていた。

原節子は15歳で日独合作映画「新しい土」に出演し、映画宣伝のためドイツへ。フランスから米国経由で帰国する。ハリウッドではマレーネ・ディートリッヒと共に食事も。頭がよく、十代半ばで欧米の女性の姿を見て日本の女性とは違う生き方を学び、モノゴトの本質を見る力を身につけていたから、自分の生き方と異なる役柄を押しつけられる映画界に不満だった。納得した出演作は民主主義を礼賛する「わが青春に悔いなし」（１９４６年、黒澤明監督）だけだった。

１９６３年、43歳で引退し、２０１５年になくなるまで50年以上の独り身を貫く。読書に親しみ、新聞にくまなく目を通して株式投資や不動産の運用で経済的にも自立していた。『原節子の真実』（２０１６年）を書いた石井妙子氏によると、原が望んだ役は細川ガラシャ。明智光秀の三女だったガラシャが戦国の掟に背き、キリシタンとして壮絶な死を遂げて４２０年。わが国は戦後、民主主義社会の道を歩んできたはずだが、どれだけの日本女性が己の生き方を貫いてきただろうか。そのことを原節子は「東京物語」で主張したのである。

37歳で引退して48年も華麗なる独身生活を謳歌したアメリカ女優、グレタ・ガルボは、こう語ったそうだ。「これまで見たものでいちばん美しかったものは、腕を組んで歩く老夫婦の姿でした」。原節子もそれと似た心情を抱いたときがあったかどうか。いまとなっては知るよしもない。

いきがい・助け合いサミット in 大阪

『助け合い大全'19』

昨年９月に開催した「いきがい・助け合いサミット in 大阪」のすべてを収録した『助け合い大全'19』です。

サミットでの全体シンポジウムと各分科会における発言要旨をまとめた『パネル編』、ポスターセッション出展の全作品を掲載した『ポスター編』、そして『提言編』を３冊セットで頒布いたします。助け合い活動、〝お互いさま〟の共生社会づくりに、ぜひお役立てください！

お申し込みは当財団まで
→ mail@sawayakazaidan.or.jp
１セット2,000円（税込み） 送料別途
※３冊セットのみでの頒布となります。

【助け合い大全'19 提言編　目次】

- いきがい・助け合いサミット in 大阪の意義と特徴
- 全体シンポジウム発言要旨
- 分科会１～54
  提言／登壇者／議事要旨
- ポスター展
- いきがい・助け合いサミット in 大阪を振り返って

ポスター編　提言編　パネル編

新しい
ふれあい社会づくりに
向けて

いきがい　ふれあい　助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 財団の活動　など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

◎新型コロナウイルス感染症の影響により、今月号に掲載する
「北から南から　新地域支援事業・各地の動き」「活動日記（抄）」
（4月１日～30日分）はありません。

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

（敬称略）（2020年4月1日～4月30日財団受付分）※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますことをご了承ください。

さわやかパートナー個人（45件）

宮城県
佐藤　かつよ
山形県
阿部　良二
栃木県
佐藤　美希
高柳　慎八郎
埼玉県
五十嵐　紀男
酒井　勝男
友國　洋
千葉県
鳥山　美知子
清水　千賀子
鈴木　章
高柴　正義
東京都
伊豆　幸美
稲川　寿子
大島　勝喜
神谷　武秀
木村　智都子
鈴木　慶子
高原　三平
長尾　立子
濱口　英雄
林　幹高
福島　治美
松尾　邦弘
吉岡　高志
神奈川県
岡本　淳
佐野　圭子
白岩　正明
角井　佑子
平野　潤一
新潟県
長谷部　義子
富山県
棚田　美智代
岐阜県
榎本　豊
静岡県
松本　郁代
愛知県
齋藤　みどり
菅　文夫
瀬川　正俊
三重県
西村　美紀子
京都府
北村　哲也
大阪府
吉兼　邦子
兵庫県
桑山　信子
西岡　日出夫
広島県
島本　幸子
福岡県
佐藤　須美子
宮崎県
岡上　マチ子
渡邊　ユミ

さわやかパートナー法人（6件）

認定ＮＰＯ法人青葉台さわやかネットワーク
一般社団法人家の光協会
株式会社中村塗装店
日本電気株式会社
ＮＰＯ法人寝屋川あいの会
ＮＰＯ法人ゆいの会

一般ご寄付（2件）

田中　茂利（2万円）
友野　喜久代（5万円）

みんなの広場

全国に広がれ地域の助け合い

高嶋　宏臣さん　兵庫県

新型コロナウイルスが大問題になっていますね。おかげで私もどこにも出かけられません。経済も大打撃だと思います。

こんな中、3月号で岡山県倉敷市真備町の助け合い活動を取り上げたのはよかったと思います。私も現役時代、倉敷に5年ほど単身赴任していましたので、豪雨被害について心配しておりました。地元の皆さんが活動を広げてそれが『さぁ、言おう』に載り、全国の地域が活性化されることになればいいですね。

助け合いはいつでも、どんな形でも！

投稿募集

『さぁ、言おう』は、皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。ぜひ、ご意見をお寄せください。

本誌で取り上げたテーマへのご意見・ご感想、人生100年時代の生き方、ボランティア活動等のエピソードなどをお待ちしています！

＊添付の投稿ハガキや投稿用箋などをどうぞご活用ください。
＊掲載にあたっては、誌面の都合により編集要約させていただく場合がありますので、あらかじめご了承ください。

送付先
〒105-0011　東京都港区芝公園2-6-8　日本女子会館７階
公益財団法人さわやか福祉財団『さぁ、言おう』編集部宛
FAX：(03) 5470-7755　E-mail：pr@sawayakazaidan.or.jp

Tsutomu Hotta

私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さぁ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さぁ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。
さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人年会費	Aコース	10,000円
	Bコース	3,000円
法人年会費（1口）	Aコース	100,000円
	Bコース	20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります（所得税の寄付控除額の上限は所得の40%－2000円）。

一般ご寄付をいただく場合のお振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団
郵便払込　００１２０-９-６６８８５６※
三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３７３１７１４
りそな銀行　芝支店　普通預金　口座番号１１７４２９７

※手数料不要の専用用紙をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

＊いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。（mail@sawayakazaidan.or.jp）

表紙絵から　はり絵・池田げんえい

「てるてる坊主」

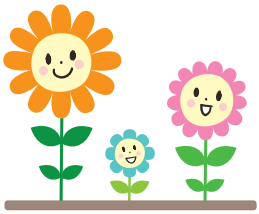
編集後記●当財団では、コロナ禍を乗り越え、共生社会をつくるための「地域助け合い基金」を立ち上げました。詳細は、Ｐ２～の巻頭言、Ｐ４～の特集、表紙裏、裏表紙をぜひご覧ください。●さまざまな助け合い活動が休止、縮小を強いられる中でも、新しい視点での活動が始まっています。緊急アンケートでも、地域でのいろいろな工夫が寄せられました（Ｐ10～）。●「活動の現場から」は長崎県諫早市。「元気なうちに」とみんなで助け合いの関係を築き、活動しています（Ｐ20～）。

助け合いを
広げよう！

新 ひとりごと

近藤　博子

今一度、近くの誰かに想いを馳せながら、
何気ない日々の暮らしを大切にし、
ゆっくりとした時を重ねながら生きていくことが、
「笑顔が真ん中にある」素敵な社会と未来に
繋がっていくのだと感じています。



●「気まぐれ八百屋だんだん」店主・こども食堂主宰
娘や孫たちと一緒に、味噌作りやぬかみそ漬けや梅仕事など、
日本の食文化の楽しみ方を伝えております。

さわやか 6月号

通巻322号　2020年6月10日発行
（毎月1回10日発行）
表紙絵　池田げんえい
イラスト　すずきひさこ
福島康子
レイアウト　菊池ゆかり
印刷所　日本印刷株式会社
編集担当　塩瀬潔泉

発行人　清水肇子
発行元　公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751　Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
https://www.sawayakazaidan.or.jp
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

さあ言おう 6月号
令和2年6月10日発行
（毎月1回10日発行）
通巻322号
発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階

つながろう、心で　広げよう、笑顔の助け合い！

「地域助け合い基金」で コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

ぜひご寄付をお願いいたします。
皆様からのご寄付が地域の助け合い活動を育みます。
（「地域助け合い基金」の内容については、本文をご覧ください）

【ご寄付の方法】

● 銀行振込によるご寄付

三井住友銀行　浜松町支店　（普通）口座番号　7859452
三菱UFJ銀行　浜松町支店　（普通）口座番号　0095446

（口座名義※いずれも同様）
公益財団法人さわやか福祉財団　地域助け合い基金

銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」（ホームページご参照）を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

● 郵便振替によるご寄付

（口座記号番号）00110−7−709627
（加　入　者　名）公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の場合の特別区）と、ひと言応援コメントなどをご記入ください。

「感謝状」

税制上の優遇措置があります

さわやか福祉財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります。

個人の皆様には、所得控除または税額控除を選択いただけます。法人の皆様には、所定の算式に基づき、寄付金額が当該事業年度の損金に算入いただけます。

いずれも、当財団発行の領収書が必要となります。詳しくは最寄りの税務署または当財団宛お問い合わせください。